

古橋氏は価値観の近代主義を超えた尊敬すべき和歌の研究者で、私は多くのことを氏の著書から学んできました。古橋氏は、ここで、自分が古代から考え、普遍性を志向したのに対して、「鈴木は近代から考えている」と、わたしの立場とのちがいを言い、その立場から、鈴木には「はっきりしない」ところがあるとも述べています。

ここに示されたものが氏の立場だとすれば、私の立場からは、それは西欧近代に生じた狭義の「文学」概念から出発して、その「美」の基準の普遍化をはかる方向を目指したものになります。古橋さんは、それには気づいておられるようですが、これだと、小西甚一氏の立場と大差ないといわれてもしかたないと思います。

『万葉集』の時代の「文学」のコンセプトは「文章博学」であり、歌は本質的に民間の歌謡の意味だったはずですが。「美」だけを真や善から切り離して鑑賞の態度とする近代的な立場——それもタテマエにすぎませんが——など成立していなかったところに立ち返って考えること。私が言っているのは、それだけのことです。その際に、言語表現の「芸」(技術)として考える点で、古橋氏と私の立場と一致していたと思っていました。

それと、西欧近代に生じた狭義の「文学」概念から出発して、その普遍化をはかる方向とのちがいは、その「普遍化」の方向が、どこを目指しているのか、によって決まると思います。「美」の表現というものの普遍性を考えるのか、それとも表現一般を対象とするのか、ということです。それが問われていたとき、祝詞もリズムだけは美的表現という立場をとったのは、アストンでした。わたしは古橋氏の立場は、それとはちがうと思っていました。

もう一度、確認しておきますが、そもそも概念がなければ物事は考えられません。そして、今日流通している「日本的人文学」と「記された言語芸術」というふたつの「文学」概念は、日本近代に発生したものです。この本では、それらを徹底的に相対化し、それぞれの特性を明らかにしました。「文学」概念を対象化するには、「近代から考える」のではなく、「近代を考える」ところからはじめるしかないということです。

逆に、わたしからいわせれば、古橋さんは、「古代から考える」ことによって、逆にそれをおこたってきたことになりすから、ここで、もう一度、「美」の普遍化の方向性を吟味していただきたいと願います。

「では、おまえはどこから考えているのか」と問われるなら、「いま、ここ」からと答えるしかありません。(1/27改訂)